

全体主義と民主主義

ジョン・デューイとソ連(3・完)

小西中和

Nakakazu Konishi

滋賀大学 / 名誉教授

かつて20世紀に全体主義と称される政治体制の時代があった。ドイツのヒトラー体制とソ連のスターリン体制である。それは残虐な大量殺戮を伴うテロルの体制と、それを正当化するイデオロギーという特徴をもっていた。20世紀半ばのナチス・ドイツの消滅、そして、世紀末のソ連社会主義の崩壊により、全体主義という言葉も現代においてアクチュアリティを失っているかに見える。

全体主義は20世紀において人類が経験した戦争と革命の時代を象徴する言葉として、それを使用する人の立場によって、複雑な意味合いと様相をおびていた。特に、ヒトラーとスターリンを同列にして全体主義体制と見なすことについては激しい賛否の応酬があった¹⁾。

本稿でとりあげるジョン・デューイ(1859-1952)は、ヒトラー体制とスターリン体制をともに全体主義として批判したことで知られている。全体主義体制の特質をドグマ化したイデオロギーへの狂信と残虐なテロルの結合に見た。そして、全体主義に対して民主主義を対置したが、両者を二項対立的に考えなかった。ドイツにおいてヒトラー体制がワイマール共和国の民主主義体制の中から出現したことを見て、一定の条件の下で、アメリカの民主主義体制の中にも、全体主義への危険が胚胎すると考えていたからである。

このことを考察するために、デューイが提示したのが、政治体制と区別して、人びとの生活様式の次元において、つまりものの見方や考え方や行動の仕方の次元において、全体主義と民主主義を考えるという視点であった。政治体制のあり方はそれを支える人々の生活様式によって支えられ、

¹⁾ 全体主義の概念の変遷については、トラヴェルソが検討している。185-186頁。

左右される。だから、生活様式のあり方によっては、民主主義体制において全体主義体制が出現するという危険が存在すると考えていたのである。

かかる観点からすれば、現代において、ヒトラーやスターリンの特定の政治体制としての全体主義が存在しなくなっても、生活様式としての全体主義は残存する、あるいは新しい形をとって再現する、それが別の全体主義的政治体制を生み出すという見方をデューイから引き出しうるかもしれない。本稿は、このような問題関心に基づいて、デューイの全体主義論における思索の跡を探ってみようとするものである。

II | デューイの問題意識

1. 「文化自由委員会」

1938年9月にミュンヘン会談が行われ、英仏による対独宥和が試みられた。しかし、翌年3月にヒトラーはチェコスロヴァキアを解体し、世界大戦の暗雲がますます広がりつつあった。その頃にアメリカで反ファシズム・反戦平和の運動が生じていたが、その有力な部分はコミンテルンの反ファシズム人民戦線を支持する共産党とそのシンパの知識人を中心とする勢力であった。彼らはスターリンの独裁体制にもかかわらず、ソ連を反ファシズムの拠点として支持し、連携しようとしていた²⁾。

他方で、スターリン独裁体制を批判し、人民戦線に反対しながら、反ファシズム・反戦平和の運動を進めようとする人びとがいた。デューイはこのなかの代表的人物であり、1939年5月に人民戦線派に対抗する形で結成された「文化自由委員会」という団体の議長に就任した。その声明は次のように語っていた。

「全体主義の潮流が世界中に台頭している。それは独立した人間の理性のあらゆる他の表現とともに文化的で創造的な自由を一掃しつつある。……名称や外観は異なるが、自由な精神への憎悪で一致しながら、全体主義の観念はすでにドイツ、イタリア、ロシア、日本、スペインで支配している。そこでは知的で創造的な独立性は抑圧され、反逆罪として処罰される」。「全体主義は、それが顕在化したら、どこでも、どんな形態でも、闘争しない限り、アメリカに蔓延するだろう」³⁾。

この声明は、ナチス・ドイツとソ連を全体主義として同列に批判し、ソ連を支持する人民戦線派の知識人たちを批判していた。これに対して、人民戦線支持の知識人たちは1939年8月10日にデューイたちの文化自由委員会の声明に対抗して、「民主主義と平和を積極的に支持する人々へ」と題する声明を発表した。それは次のように語っていた。

デューイたちの文化自由委員会は「ファシスト諸国とソヴィエト連邦がひとしくアメリカ的制度や民主主義的生活様式の脅威であると強調している」。「彼らは、反ファシスト感情をソヴィエト連邦に転化させる目的で、ソヴィエト連邦が基本的に全体主義諸国と類似しているという途方もない虚偽をあおっている」。ソ連は「戦争とファシズムに対する防波堤」である。文化自由委員会は、「民主主義と平和に対して口先だけの信心を見せながら、現実にはソヴィエト連邦を攻撃し、反動派を支援すること」に陥っている、つまり、「反侵略の統一戦線を妨害し」、「民主戦線を分裂させようと試みている」、というのであった⁴⁾。

両派の間で激しい批判の応酬が行われたが、現実の推移は人民戦線派知識人たちに不利な方

2) トラヴェルソ、86-87、92頁。文献からの引用や要約については、出典箇所を原則的に段落末に示した。邦訳を参照したとき、引用する際に変更したところがある。

3) 新川1973、273、275頁。Cf. 1939d、276。

4) 同書、286頁。新川1982、135-136頁。

向へと動いた。彼らの声明が公表された8月23日に、「独ソ不可侵条約」が調印された。デューイにとって、それは「二つの全体主義国家の同盟」と思われたが、人民戦線派に痛烈な打撃を与えた。その条約は、ソ連がファシズムと戦争に対する防波堤だとする彼らの主張に深刻な問題を投げかけたからである。かくして、アメリカにおける人民戦線の動きは、1941年6月にソ連がドイツに侵攻され、連合国として米英との「大同盟」を結ぶまで後退した⁵⁾。

デューイの全体主義論の特徴は、文化自由委員会の声明と同じように、ソ連とナチス・ドイツの政治体制の類似性を指摘し、それらを全体主義として批判することにあった。彼は、声明よりも以前の1937年に、ソ連とナチス・ドイツの体制の類似性と接近(同盟)を予測し、「政治的方法」が同じになっていく、と指摘していた。では、その方法とはどのようなものだったのか⁶⁾。

2. イデオロギーとテロル

「全体主義的体制は、意見だけではなくて、感情、欲求、情動をも支配することによってすべての市民の生活全体をコントロールする」。そして、それを実際に担保するために、「生活のあらゆる局面への組織された暴力の侵入が行われる」。つまり、全体主義体制では、市民の思想・信条の自由、学問・表現・結社・集会の自由などの基本的な権利が抑圧され、不当な逮捕、拘禁、追放、処刑、秘密警察、強制収容所などの残虐な暴力的手段が無制限に使用された。こうして、市民は社会的団結の名の下に独裁的権力への「全体的な忠誠」を要求され、画一的な思想や随順的な行動を強制された。かかる事態はスターリンやヒトラーの政治的支配

に共通に現れた方法であり、デューイはそこにイデオロギーとテロルの結合という全体主義の特質を見たのである⁷⁾。

全体主義が残虐なテロルの恒常化、肥大化を特徴とすることはよく知られており、そのことを否定する必要はないが、それに注目するだけでは、全体主義の根本的な特質を理解することにはならない、とデューイは考えた。なぜ市民たちはスターリンやヒトラーの全体主義を支持したのか、あるいは、何が残虐なテロルを正当化したのか、これらを明らかにすることが彼の全体主義論にとって不可欠の問題だった。その問題を検討することによって、アメリカにおいて全体主義が生じてくる危険を防止したいと思っていたからである。

政治的支配は暴力的手段による恐怖だけに基づいて成立しない。ヒトラーの政権獲得は、突撃隊の行動によるテロルだけではなくて、彼の主張がドイツ民族の再生という何ほどかの「理想主義的」特徴をおびていたからである、とデューイは見た。同じように、スターリンにおいても、その主張は社会主義の建設という「理想主義」の要素を含んでいた。国民は支配者の示す「理想主義的」な側面を信じて、全体主義的な体制を支持し、それに随従したのである。

問題は、「理想主義的」な要素を含む全体主義のイデオロギーがいかなる経緯を経て残虐なテロルと結びつき、それを正当化するに至るのかということである。

イデオロギーの内容において、スターリンの階級理論とヒトラーの人種理論では異なるところが多い。では、どこに全体主義イデオロギーとしての類似性があるのか。デューイの問題関心はこの点にあったと言ってよい。彼はそれをイデオロギーの

5) Dewey 1939c, 250. Bullert, 137-139. Westbrook, 485-486.

6) Dewey 1937, 332.

7) Dewey 1938, 70. Dewey 1942, 49. 後述するように、全体主義におけるイデオロギーとテロルの結合という問題を徹底的に突きつめたのが、ハンナ・アレントの仕事だと思われる。

内容自体というよりも、思考と行動の様式、デューイの言う生活様式と結びつけて解明しようとしたと思われる。以下において、スターリンとヒトラーの全体主義についてデューイの理解を探ってみよう⁸⁾。

Ⅲ | スターリンの全体主義

スターリンの全体主義はそのイデオロギー的基礎としてレーニンに始まるソ連マルクス主義をもっていた。マルクス主義に関するデューイの言及は様々な著作で見られるが、1939年に『自由と文化』という著作を刊行し、「全体主義的経済学と民主主義」と題する章でソ連マルクス主義を検討した。これを主な素材として、彼がソ連マルクス主義とスターリンの全体主義の関連をどのように理解したかを検討してみよう⁹⁾。

1. スターリンとソ連マルクス主義

マルクス主義は、元来、社会主義革命を通じて階級のない社会を実現する、それによって人類を抑圧や隷属の状態から解放するという普遍主義的な目標をもつマルクスの思想として登場した。これは、ドイツ民族の支配する世界秩序の創出を目標とするヒトラーの思想の特殊主義的な性格とは異なる点である。デューイはマルクス主義が掲げる人類の解放という理想を支持し、したがって、1917年の革命以降のソ連の社会主義建設の動向を世界にとって注目すべき社会的実験として評価した。しかし、それは1930年代においてスターリンの全体主義的体制を生み出すという逆説的な帰結をもたらし、デューイはそのことをきびしく批判するようになった¹⁰⁾。

なぜマルクス主義は全体主義的体制の出現を防止しえず、むしろそれを正当化することになったのか。デューイは根本的な理由をマルクス主義のもつ一元主義的ないし絶対主義的な原理に見出した。

デューイによれば、現代社会の複雑な事象を理解し、問題を解決するためには、一方での「人間性」を構成する諸要素—心理や精神—と、他方で行為環境としての「文化」を構成する諸条件—政治、経済、科学、技術、芸術、道徳、宗教—との相互作用として社会を理解するという方法的観点を持たなければならない。これは多元主義的で複眼的な見方であり、かかる観点からすれば、「何か一つの要因を分離することは、たとえ一定の時点でその作用がいかに強いとしても、問題の理解と知的な行動にとって致命的であった」¹¹⁾。

デューイは、社会における経済的要因の役割を否定しないし、マルクスによる資本主義経済体制への鋭い批判を評価した。しかし、マルクスは、社会を構成する諸要因の相互作用から経済的要因を分離し、「経済的生産諸力の状態が究極的に政治、法律、科学、芸術、宗教、道徳などのあらゆる社会的諸活動を決定する」という見方、いわゆる史的唯物論(唯物史観)を提示した。デューイによれば、これは、「経済というそれ自体否定できない要因が分離され、あたかもあらゆる社会変化の唯一の原因として扱われている」と見られた¹²⁾。

ただ、デューイは、マルクスが経済以外の諸要因(「上部構造」)による経済的要因(「土台」)への一定の反作用を認めたことも理解していた。しかし、この反作用の承認は史的唯物論における「重要な限定」であったが、「後になって無視されがちになり」、ソ連マルクス主義では特にそうだった¹³⁾。

8) クリック、88–89頁。トラヴェルソ、172–177頁。

9) デューイとマルクス主義については、小西の一連の著作でも検討している。とくに、2003、2017。

10) Dewey 1937, 331. 小西2017。

11) Dewey 1938, 79, 130頁。

12) Ibid., 117, 118. 訳169頁。

13) Ibid., 118. 訳170頁。

もしこの限定が十分に生かされたならば、事態は変わっていたであろう、とデューイは推測した。上部構造の側からの土台に対する反作用が認められ、それによって社会全体にどのような結果を生みだすかを理解するには、「抽象的な理論ではなくて、現実存在する諸条件の相互作用を観察する」という方法が必要となる。この方法を採用するとき、社会を動かす様々の諸要因の相互作用を検討するという多元主義的なそして相対主義的な方法的立場につくことになったであろう、というのである。もちろんこの立場においても諸要因の中で経済的なものが極めて重要であることを否定する必要はなかった¹⁴⁾。

しかし、ソ連マルクス主義はこのような方向に進まなかった。経済という単一の原因によって社会現象を説明するという方法的立場を採用し、したがって、その理論は一元主義的で絶対主義的な性格を顕著に帯びることになった。マルクス主義におけるかかる理論的特質をもたらしたものは何か。デューイによれば、それはマルクスによるヘーゲル弁証法の転倒という方法的手続きの中に胚胎していた。

ヘーゲル哲学では、絶対的理念が「論理のカテゴリー」の弁証法的運動によって歴史を貫徹し、絶対的必然性をもってその最終的な実現に向かうと説かれていた。マルクスはヘーゲルの観念論を唯物論へと転換し、絶対理念の代わりに階級闘争を据えた。かくして、マルクスは、「絶対的必然性をもって作用する単一の法則」として階級闘争を把握することによって現存するブルジョア資本主義の「矛盾」を観察した。そして、「矛盾」の弁証法的運動によって共産主義社会という究極的目標が指示される、と考えた¹⁵⁾。

ソ連マルクス主義は、このマルクスの教説に基づいて、「経済的運動が究極的目標に向かう過程を必然的に自動的に決定する」、換言すれば、階級闘争の法則が歴史を貫徹し、「あらゆる時間と場所で妥当する究極的な真理」を示す、と主張するに至った。これはまさしく、一元主義的で、絶対主義的な経済決定論の特徴を示していた¹⁶⁾。

さらに、重要なことは、マルクス主義では、「歴史の法則が革命的行動の法則になる」ということであつた。つまり、マルクス主義の理論は、社会ないし歴史を認識する科学的法則を指示するのみでなく、革命的行動の実践的法則をも提示すると考えられた。科学的法則が示す真理なるものによって正当化されていると感じることによって行動に奮い立つが、理論のドグマ的な性質により、現実生じる結果の検証は行われぬ。そこでは科学の真理性への盲信があるだけであり、知性の本来的機能は麻痺していた。マルクス主義は「過去の神学体系」に類似する「絶対主義的」性格を帯びていたというのである¹⁷⁾。

2. スターリン独裁体制とテロル

1930年代に顕著になったソ連における市民の自由や権利の抑圧、あらゆる反対者に対する容赦のない迫害や粛清の事実について、旧いツァー専制政治の遺産であるとか、あるいは社会主義建設における過渡的現象であるとかの説明がなされた。人民戦線を支持する知識人たちはそうであつた。しかし、デューイは、「実際にはそれらがマルクス主義的なタイプの一元論的理論によって助長された」と理解した。つまりマルクス主義の絶対主義的性格がスターリン支配体制の残酷なテロルと深くかかわっていると見たのである¹⁸⁾。

14) Ibid. 訳170頁。

15) Ibid., 120. 訳172頁。

16) Ibid. 訳172頁。

17) Ibid., 119, 122. 訳172, 174頁。ルフォール、62頁。

18) Ibid., 129, 127. 訳185, 180頁。

唯一の真理が存在すると標榜する理論は、何が真理であるかの確定を必然的に要請する。「絶対主義的原理は異端の存在を許さない」からである。そのような理論が政治的支配と結びつくとき、真理の最終的な判定権の所在は政治的問題となる。理論の「解釈」権を独占する存在が必要となるのである¹⁹⁾。

マルクス主義に依拠するソ連では、そのような存在として、まず、唯一の政党としての共産党、そして次に、党内で選ばれた幹部会が登場し、最終的には、最高権力者のスターリンが真理の判定権を独占した。スターリンの決定は真理を体現するものとされ、それと異なる意見は異端と断罪された。異端は、「知的な誤謬以上のものであり、邪悪で危険な意志のしるし」とみなされたからである。だから、スターリンに対して異論を示すものは、「反革命」、「反ソ連」というレッテルが貼られて、絶対的な非寛容＝物理的な意味を含む抹殺が続くことになった²⁰⁾。

かくして、科学的真理を体現すると称するスターリンと共産党への盲信が支配体制にビルトインされる時、マルクス主義はテロルを正当化するイデオロギーへと変質した。マルクス主義理論の真理性への信仰によるスターリンや共産党の無謬性の神話が人びとの精神を呪縛し、スターリン独裁体制のテロルを正当化したのである。

スターリンは階級闘争論というマルクス主義の歴史法則によってクラーク(富農)の絶滅を正当化した。これはやがてスターリンに異論を唱え、対立する者に対して、拡大され、大規模な粛清のテロルが続くことになった。

ハンナ・アレントによれば、事態はさらに深刻化して、犯罪事実のないものにまで、テロルが拡大

された。すなわち、全体主義はその本質的特徴として、「イデオロギーによって導き出したシェーマに従って可能であると<予見した>ものをすでに現実として考慮に入れる」というフィクションを生み出した。だから、テロルの対象が、事実即して「疑わしい人物」としてではなくて、シェーマに基づく「客観的敵」として次々に作りだされることになった。スターリン独裁体制において、最初は党内反対派やクラーク(富農)の抹殺から始まり、やがて、階級の敵、人民の敵の名目で犯罪事実のない国民へとテロルが拡大されたのはそのためであった。結果として、何千万という無辜の民衆が強制収容所へ送られて、酷使され、非業の死を遂げさせられたのである²¹⁾。

だが、アレントが言うように、ソ連マルクス主義の思考様式は、「我々が理性と呼ぶものとはもはや関係のない、・・・イデオロギーで凝り固まった科学性によって進められる」ものだった。デューイはマルクス主義の絶対主義的原理の中に、知性の機能麻痺と硬直的論理の強制を見てとった。それがスターリン独裁下の残酷なテロルを正当化する基礎となったと理解したのである²²⁾。

IV ヒトラーの全体主義

デューイは1942年に、『ドイツ哲学と政治』(1915)を再刊した。これは、第一次世界大戦時の初版に「序論：ヒトラーの国家社会主義における一元的世界」を増補したものであった。それは、アメリカの参戦によって敵国となったナチス・ドイツの指導者であるヒトラーの思想の分析を通して全体主義の特徴を説明し、併せてそれに対抗する拠

19) Ibid., 127. 訳180頁。

20) Ibid., 132, 120. 訳185, 180頁。

21) アーレント、204、210頁。クルトワ、ヴェルト、15頁。Dewey 1947, 297.

22) アーレント、227頁。クルトワ、パネ、347頁。

り所として民主主義的生活様式の創出という課題を提示するものであった。

1. ヒトラーと「理想主義」

デューイによれば、ヒトラーの全体主義体制において、残酷な暴力行使の側面についてよく知られているが、ドイツ国民がヒトラーを支持した理由としてそれだけを重視することは誤りである。なぜなら、国民は、ヒトラーの主張が提示した「理想主義」の要素にひきつけられたと考えられるからである²³⁾。

ヒトラーが台頭する現実的前提としてあったのは、第一次世界大戦の敗北により打ちひしがれ、弱体化し、屈辱的なドイツ国民の状態であった。彼によれば、かかる状態に陥った原因は「精神的なもの」であり、したがって、そこからの「救出は第一に精神的なものでなければならない。理想主義的な信念の再生がまず必要である」、とされた²⁴⁾。

ドイツ人の世界観の中には理想主義の伝統があるとヒトラーは見た。それはドイツの伝統的哲学が表現していたものであり、物質的ないし経済的なものよりも精神的なものに高次の価値を認めるという特徴をもっていた。現実的な利害の考慮を超えて、理想的な目標を追求するというわけである。

だが、この理想主義は、内面世界と外面世界の分離という伝統的哲学の二元論的世界観に制約されており、現実から遊離した抽象的な観念の次元での、「不毛な形式的理想主義」にとどまった。つまり、「あくまで現実の状況に立脚しつつその状況に具体的変革を企てようとする努力を導く指針」を示す理想主義ではなかった。だから、実際

には現状への随順という態度を導くような社会的弊害を伴っていた。かくして、デューイによれば、ドイツの潜在的な理想主義を再生させるために、二元論的世界観を克服して、「ドイツに一元論的世界を作り出す」ことが「ヒトラーの使命」になったというのである²⁵⁾。

ヒトラーにとって、理想はドイツ国民を一層団結させる、ドイツ民族の新しい共同体の創出であった。彼は、理想主義の内容を「知的な(あるいは擬似知的な)ものから情動的または激しい熱情的なものへと移す」ことによって、ドイツの潜在的な理想主義の強さを復活させ、しかもそれを「技術的な効率や組織」と結合しようとした²⁶⁾。

ヒトラーが理想主義に与えた情動的内容とは、「血と土」に象徴される「自然の力」への信仰、つまり、太古の民族の自然崇拜や神話に由来し、またゲルマン民族の優秀性や優越性を説く人種理論と結びついていた。「ドイツ国民の統合は究極的に血ないし人種から生じる」、そして、それこそ「人々を集団的に行動に駆り立てる」と考えたのである²⁷⁾。

ヒトラーは、原始的なゲルマンの神話や儀式を復活させ、「それらがもつ感情を揺さぶるような強烈な力」によってナチスへの支持を獲得しようとした。さらに、生存競争と適者生存を説く社会ダーウィン主義を特異な人種理論と結びつけて、ドイツ民族は自らが支配的な地位を占める世界秩序を樹立すべき使命をもっていると訴えることによって国民を行動に駆り立てた²⁸⁾。

その人種理論は科学的言説として荒唐無稽であったが、ヒトラーはそのことをいささかも顧慮しなかった。ただ、「狂信的な行動に感情的に訴える武器として使用しうる単純で、わかりやすいシンボル」を求めたのである²⁹⁾。

23) 1942b, 19, 20. 訳15, 16頁。宮田、69頁。

24) Ibid., 19. 訳15頁。

25) Ibid., 29, 25. 訳26, 21頁。

26) Ibid., 37. 訳35頁。

27) Ibid., 34, 37. 訳31, 34頁。

28) ノイマン, S., 216–217頁。ブラッハー、76頁。

29) Ibid., 35. 訳32頁。ノイマン, F., 94–95頁。

デューイによれば、ヒトラーは「自然、生命、血をしばしば明白に理性と同一のものと見なしていた」。それらが引き起こす強烈な感情の中で「冷たい知性が把握し得ない高次の真理」が明らかになると考えたからである。「情動は本来的に全体主義的であり、だから、それがひとたびかき立てられるとき、感情は信念やあらゆる知的活動らしきものを支配する」。だから、彼は効果的な技術的手段として利用する以外には、およそ知的な判断や科学を軽蔑していたのである³⁰⁾。

ヒトラーによれば、真理は知性よりも感情において顕現するとされ、知性は感情に従属させられた。感情が知性を覆い尽くすことによって、ドイツの伝統哲学における理性と感情、内面世界と外面世界、理想と現実といった二元論的世界が克服されたのである。

しかし、情動を中心に据えたヒトラーの理想主義は、知性の働きを麻痺させることによって、「具体的な社会的諸状況の経験分析や実験的利用から切り離された理想主義」であった。だとすれば、ヒトラーが提示した「血、人種、土地」を土台にして真のドイツ民族の共同体を建設するという理想は、現実即ち行動に必要な指針を立てると言うよりも、当時の打ちひしがれたドイツ国民の心情に訴える架空の物語の特徴をもっていたということになるであろう³¹⁾。

ドイツ国民によるヒトラーへの支持は、現実の問題を知的に考えるよりも、元気と安心を与えてくれそうなヒトラーの虚構の理想の世界を信じて、情動的に行動に駆り立てられたという意味を多分に含んでいた。だから、デューイは、ヒトラーがドイツで成功し、その結果世界の人々に脅威を与えている現状は、「抽象的かつ「絶対的な」理想を信ず

る危険性を悲劇的な形で警告している」、と指摘したのである³²⁾。

ヒトラーによって創出された全体主義は、「頂点の独裁的な絶対的指導者と底辺の統制された従順な大衆、そして、その中間における階層的秩序のサブリーダーによって構成される逆転した(inverted)民主主義」という政治構造をもっていた。そして、これを担保したのが、残虐なテロルの体制であった³³⁾。

2. ヒトラー独裁体制とテロル

ヒトラーは、ドイツの伝統的な理想主義における理想と現実の二元論を念頭において次のように語っていた。「理想とハードな事実の同一性は、運命がドイツ国民に呼びかける理想への信念と、生活のあらゆる局面を——政治や軍事だけでなく、経済、文化、芸術、教育を——統制するために、徹底的に組織された暴力(force)を結合することによって今ここで実現される」。ヒトラーの全体主義におけるイデオロギーとテロルの結合がここに示されている³⁴⁾。

ヒトラーは、ナチスのイデオロギーに基づいてドイツ国民の団結を実現するために、「協調(coordination)」の政策—ドイツ語のGleichschaltung(均制化)の政策—を実行した。それによって、労働組合、身分、階級、政党、邦は廃止されるか、または、権限が縮小された。さらに、宗教団体、教育、出版、報道、集会の統制や廃止が徹底的に実行された³⁵⁾。

こうして、市民の基本的権利や自由が抑圧され、体制への随従、思想と行動の画一化が求められた。「進んで協調しないものあれば、それらを消滅させる」というのがヒトラーの方針であり、「ナチズ

30) Ibid., 44, 35. 訳41, 33頁。

31) Ibid., 29, 26. 訳30, 27頁。

32) Ibid., 27. 訳30頁。このことはかつての「八紘一宇」のイデオロギーを思い起こせば、よそ事ではなかった。そして、「オウム事件」のことを考えれば、違い昔のことと思われまいであろう。

33) Ibid., 41. 訳39頁。

34) Ibid., 26. 訳23頁。

35) Ibid., 27. 訳24頁。

ム支配にとって実際の、もしくはその恐れのある、すべての敵を排除する」ために、強制収容所に最悪の形で現れたテロルの体制が敷かれた³⁶⁾。

では、ヒトラーの全体主義はいかなる論理でテロルを正当化したのであろうか。デューイはこのことをヒトラーとヘーゲルの思想的連関の中に探ろうとした。ヒトラーは哲学者たちの著作を読んだり、研究したりしたこともなかったことから、ドイツ哲学と彼の思想に直接的な関連を見出すことは困難である。しかし、デューイは、ヒトラーとヘーゲルの政治哲学や歴史哲学には「連続性(continuity)」があると見た。それはどういうことだろうか³⁷⁾。

ヘーゲルは、人間の精神の働きを、「理性(Vernunft)」と「悟性(Verstand)」に区別し、悟性を理性よりも下位に位置づけた。悟性は、我々が普通に知性と呼ぶものであり、「反省、探求、観察、実験」といった働きを意味している。近代社会における差別と分裂—「ブルジョアの側面」—は悟性の作用によるものであり、それを克服して社会の統一をもたらすのが、理性の創造的働きだとされた。ヘーゲルが悟性、つまり、知性に積極的な機能を認めなかったことは、ヒトラーによる知性の蔑視と通底していた³⁸⁾。

ヘーゲルによれば、「歴史は、この創造的な理性の顕現である」。絶対精神(絶対的理性)は歴史において、その「論理」の自己運動を通じて、最終的にその目的を実現する。歴史の過程で諸民族を創出するが、特定の時代において、絶対精神の展開を担う支配的な国民とその権限を持たない従属的な国民を作り出す。現実の人間は「衝動や情熱や欲求、あるいは各人の私的な利己主義に従って行動する」が、絶対精神から見れば、その「器官ないし代理人」として、「盲目的かつ無意識的に」、絶

対精神の意志を実現している、と説かれるのである³⁹⁾。

デューイは、かかるヘーゲルの見方の中に、ヒトラーとの「真のきずな」を見た。すなわち、ヘーゲルの絶対理性がその最終的な目的の実現を人間の衝動や欲求に基づく無意識的な行動に依拠するという形式は、ヒトラーがもつばら大衆の熱狂する本能的な行動に依拠したと繋がついているというのである。いずれにおいても、人間の情動的な行動が最終目標の実現を担うという理由から正当化されることになる⁴⁰⁾。

さらに、ヘーゲルが、絶対精神は世界史において、それを体現する勝者としての支配的国家と敗者として無価値の従属的国家を作り出すと説いたことにも、ヒトラーとのつながりが見られる。国家を民族共同体に読み替えれば、「ドイツ民族が本来的に優越性を持ち、他民族の運命を決定する定められた権利をもっている」というヒトラーの主張は、ヘーゲルの考え方に通じるものがある。だから、デューイによれば、「ヒトラーがヘーゲルによって予見された使命の実行者だと主張しても無理はない」というわけであった⁴¹⁾。

デューイはこれ以上のことは具体的に語っていないが、ヒトラーの全体主義におけるイデオロギーとテロルの関連を探るために、いくらか敷衍してみよう。

ドイツ国民はヒトラーによって提示された世界に冠たる民族共同体の建設という擬似神話的な理想目的や使命を盲信し、衝動的ないし情動的な行動に立ちあがった。ヘーゲルの見方によれば、そのような盲目的ないし無意識的な行動を通してナチス・ドイツの理想目的が最終的に実現されると解釈される。ここから逆に、本能的な情動に駆り

36) Ibid., 28. 25頁。コーゴン、36頁。

37) Ibid., 41. 訳39頁。宮田は、ドイツ・ファシズムの思想史的基盤をドイツの伝統的哲学の中に探っている(423、426、428、430頁)。

38) Ibid., 42. 訳40頁。

39) Ibid., 43. 訳41頁。

40) Ibid., 43-44. 訳41-42頁。

41) Ibid., 43, 13.44. 訳43, 9,42頁。

立てられた行動がテロルを引き起こすとしても、それは理想目的を実現する手段として正当化される、という考えに至るのは困難ではない。

前述したように、スターリンの全体主義においては、ヘーゲル哲学の唯物論的転倒により、絶対理性の代わりに階級闘争が据えられた。では、ヒトラーにおいてはどうかであろうか。これを考えるために、アレントを参照しよう。

「弁証法的唯物論と人種主義の二つの世界観は、運動—自然の運動もしくは歴史の運動—として人類を貫き、すべての個人を否応なしに引きずっていく超次元的な力を前提としていた」。両者は、「まったく異なるイデオロギーであったのにこの二つの中に運動法則がひとしく現れていることは奇妙である」⁴²⁾。

アレントは奇妙だと言っているが、デューイの言うように、それらがともにヘーゲルの歴史哲学における絶対理性の運動の考え方に繋がっているとすれば、その共通性も理解されるように思われる。絶対理性の位置を占めるのが、スターリンにあっては、歴史法則としての階級闘争理論であり、ヒトラーでは、自然法則としての人種理論である。ヘーゲルの意図とは関係なく、その絶対理性の考え方は、全体主義において生じたイデオロギーとテロルの結合を正当化する論理と繋がっていた⁴³⁾。

アレントはこうも語っている。「いずれの場合にもこの運動法則は、運動が円滑に進行するように<有害なもの>あるいは無用なものを除去する掟となるのだ。この運動法則を実定法に翻訳したとすれば、その命令は「汝殺すべし」でしかあり得ない」。ロシアのクラーク(富農階級)やドイツにおけるユダヤ人はその運動の円滑な進行にとって有害

なものとして絶滅の対象とされたのである。アレントはまた次のように指摘した⁴⁴⁾。

「すべてを一つの支配的要因に還元するようなイデオロギーの整合性は、一方では世界の不整合性と、他方では人間の行為の予測可能性といつも対立する。テロルは世界を整合的にし、その状態を維持するために必要とされる。つまり、テロルは人間が自発性ととも、とりわけ人間的なものである思考と行為の予測可能性を失う地点まで、人間を支配するのである」⁴⁵⁾。

デューイによれば、人間の思考と行為の予測可能性を担保するものは現実的経験と触れ合う知性の働きであった。しかし、全体主義のイデオロギーにおいては、ドグマ化した階級理論への盲信によってか、あるいは社会ダーウィニズムと結びつけられた神話的人種理論に刺激された感情の支配によって、知性の機能はまったく麻痺させられた。デューイが、一元主義的で絶対主義的な理想やイデオロギーをもつことの危険性を指摘したのはそのためであった。では、全体主義の危険を防止する方途はどのように考えられたのであろうか⁴⁶⁾。

V 民主主義的生活様式

デューイは、民主主義を政治機構や法制度の次元だけで考えることの限界を以前から感じていたが、ヒトラーの全体主義がワイマール共和国というドイツの民主主義体制から出現したことによって一層そのことを自覚した。民主主義的な憲法や政治機構があるだけで安心できない。全体主義を防止するには、個人の日常生活における行動様式、つまり、ものの見方、考え方、そして行動の仕方に

42) アーレント、274頁。

43) カッシーラーによれば、ヘーゲルの思想が「自らは意識しないで人間の社会的・政治的生活のうちにかつて現れた最も非合理的な力を解き放ったということこそ、彼の悲劇的な運命であった」(467頁)。ブラッハー、80頁。

44) アーレント、274頁。

45) コーン、175-176頁。

46) Dewey 1942b, 172-175。

まで掘り下げて民主主義を考え直すことが必要だ
というのである⁴⁷⁾。

「民主主義の現在の強力な敵に首尾よく対抗し
うるのは、個人の中に人格的な態度を創り出すこ
とによってのみである」。その態度は「個人の主体
的な自発性と主体的な共同性」を実現しようとし
る信念に基づくものであった。デューイは、それを
「個人の、一人一人の生活様式としての民主主義
(democracy as a personal, an individual way of
life)」と呼んで、それが個人の生活態度や生き方
として実現される時、換言すれば、各人がそれを
習慣として身につけると、全体主義に対抗する拠
り所となると考えた⁴⁸⁾。

生活様式としての民主主義は次の三つの信念
によって支配される。一つは、各人が人間の可能
性に対する生き生きとした信念をもつことである。
これは人間の平等性への信念であり、人種、性、
生まれ、財産などによる差別を否定することによ
って全体主義に見られる不寛容、残虐行為、憎悪
などを防止する。しかし、この信念は単に法律に規
定されるだけでは不十分であり、人びとの日常生
活の出来事やつながり、そして会話のなかでお互
いに生き生きと示しあうことが必要である。すべ
ての人が他者による強制や押しつけから逃れて自由
に生きる能力をもっていることをお互いに確認しあ
うのである⁴⁹⁾。

次に、民主主義的生活様式は、「人間が、適切
な条件を与えられるなら、知的な判断や行動の能
力をもっているという信念によって支配される」。こ
の信念が、「自由な探究、自由な会合、自由なコ
ミュニケーションによる事実や思想の自由な活動」、
そして、「世論の形成における協議、会議、議論や
説得の役割」を支えると考えられたからである⁵⁰⁾。

全体主義体制下で、人びとは、「スパイ活動の
恐怖」、「私的な会話のために集まる友人たちの会
合に及ぶ危険」、「人種、皮膚の色、財産や教養の
違いだけでなく、宗教や政治やビジネスに関する
意見の違いという理由でも生じる不寛容、暴言、悪
口」、「相互の疑惑、罵倒、恐怖や憎悪」、などが広
がる中で暮らしている⁵¹⁾。

これらのことを全体主義的生活様式と呼ぶなら
ば、そのような生活様式こそは民主主義的生活様
式を脅かすものであり、民主主義を破壊するた
めに、「公然たる抑圧よりも一層効果的である」。「全
体主義国家が例証したように、公然たる抑圧は、
個々人の心の中に憎悪、疑惑、不寛容を創り出す
ことに成功するときのみ、効果的なのである」。つ
まり、全体主義のテロルは全体主義的生活様式
に支えられたというわけであった⁵²⁾。

デューイによれば、全体主義的生活様式に対抗
するためには、「街角で隣人たちと自由に集まり、
検閲されていない日々のニュースについて語り合
うこと、そして、家の中で友人たちと集まり、自由
に会話すること」が不可欠であった。要するに、人
びとが日常生活において自由で具体的なコミュニ
ケーションの場を確保することが必要であり、それ
が「民主主義の核心的で究極的な保障」となると
考えられたのである⁵³⁾。

最後に、民主主義的生活様式は、「日常的に他
者と協同するという個人の信念によって支配され
る」。すなわち、各人は必要や目的、結果において
違いがあり、対立や競争が生じるとしても、「友好
的な協調の習慣が生活にとって貴重なものだ」と
いう信念をもつということである。この信念があれ
ば、「生じてくるあらゆる紛争をできる限り、解決の
手段としての力や暴力の雰囲気や環境から、議論

47) Deweyの民主主義観については、小西2003。3章、7章。

48) Dewey 1939a, 91, 1939b, 226.

49) Dewey 1939b, 226-227.

50) Ibid., 227.

51) Ibid., 227, 229.

52) Ibid., 228.

53) Ibid., 227.

や知性のそれへと移す努力が生まれ、その結果、意見の異なる人を何かを学びうる友人として遇するようになる」⁵⁴⁾。

要するに、力にたよらない平和的な人間関係への信念をもつことは、異なる意見に対する寛容な態度を指示する。それは、論争や紛争が生じて、「一方が他方を力によって抑圧するのではなく、各自の意見を表明し、ともに学びうる協同の仕事としてそれらに取り組むという可能性」を信ずることである。力による抑圧は、全体主義によく見られるような公然たる投獄や強制収容所に限られない。「嘲笑、暴言、脅迫という心理的手段によって生じるときも暴力的な抑圧である」と考えるべきであり、民主主義的生活様式においても異なる意見への不寛容な態度として現れうる。だが、「異なる意見を表明することは、他者の権利であるというだけでなく自己の生活経験を豊かにする手段でもある」と信ずることが、民主主義的生活様式に不可欠の態度であり、その本質だというのである⁵⁵⁾。

デューイによれば、民主主義的生活様式は科学のあり方とも結びついている。それは人びとの知性のあり方に影響を及ぼしているからである。知性のあり方の問題は、科学の「タコツボ化 (compartmentalization)」、つまり、科学が専門分野に閉じこもり、社会生活の動向から疎遠になる傾向に示されている。「タコツボ化」によって、社会や政治の問題において、科学の本来的な精神や方法が利用されず、その結果、絶対的で、非合理的な思考が現れやすくなり、また、「結論的また独断的な主張の権威」が幅を利かせるようになる⁵⁶⁾。

ヒトラーは「タコツボ化」によって高度に発展した科学技術を「ナチの政策の道具」にしなが

政策の基底にあるイデオロギーは非合理的な神話的思考に満ちていた。社会や政治の問題において、知性が、つまり、実際の経験に基づく仮説と検証という科学の精神と方法が有効に機能しなかったのである⁵⁷⁾。

デューイによれば、アメリカでも「科学のタコツボ化」の傾向に伴う知性の機能低下が現れており、民主主義的生活様式の定着を妨げている。ニュー・ディールの時代において、経済理論のドグマ化によるレッセ・フェール型資本主義体制の賛美に潜む絶対主義的思考はその顕著な例であった⁵⁸⁾。

民主主義的生活様式の観点から見ると、アメリカの民主主義の現状は危ういものとデューイには感じられた。「経済的地位、人種、宗教についての偏見はコミュニケーションに壁を作り、その作用を歪めるがゆえに、民主主義を脅かす」からである。民主主義的生活様式を創出するには、かかる偏見を解消することが必要であり、偏見を生みだす基礎としてある経済や経営のシステムの改革も不可欠である。このことが実現されない限り、アメリカにおいて民主主義的生活様式が定着しているとは言えず、全体主義の危険も存在している⁵⁹⁾。だから、その創出が課題として提起されたのである。

デューイは平和主義の立場から第二次世界大戦に反対していたが、最終的には1941年12月のアメリカ政府による参戦決定を認めた。そして、次のように考えた。「全体主義国との戦争は侵略の領域を絶えず拡大することによってのみ生存できるような攻撃的生活様式との戦いである。それは生活のあらゆる局面に組織された暴力が侵入してくることに對する戦いである」⁶⁰⁾。

54) Ibid., 228.

55) Ibid.

56) 1942a, 46, 訳45頁。カッシーラー、13頁。藤田、43-44頁。

57) 1942a, 46, 訳45頁。

58) *ibid.*, 147, 訳201頁。

59) *Ibid.*, 46, 訳44頁。Dewey 1939c, 367-368. 1939c, 365.

60) *Ibid.*, 49, 訳47頁。

かかる考え方から、全体主義諸国に対する軍事的勝利を期待したが、参戦すれば、アメリカでも、国民の思想や行動の統制という戦時体制下の全体主義的状况が生じることを予想した。だから、彼はその行き過ぎを防止するとともに、戦後において、その状況を解消し、民主主義的生活様式を創出することを訴えた。全体主義国を軍事的に打倒しても、アメリカ国内において全体主義的な生活様式が存在すれば、全体主義との戦いが終わったことにならないからである⁶¹⁾。

VI むすびに代えて

第二次世界大戦の結果、ドイツにおける政治体制としての全体主義は消滅した。また、20世紀末の社会主義の崩壊で、ソ連における全体主義体制の問題も消滅した。だから、全体主義論は現代においてアクチュアリティを失ったように見える。では、全体主義と民主主義の問題を人びとの生活様式の次元で考えるというデューイの観点も無意味になったのであろうか。

第二次大戦直後には、デューイの母国アメリカで、ソ連社会主義体制との厳しい対決に直面して、既存のアメリカの民主主義体制を絶対化する硬直的なイデオロギーが反共主義と結びついて、マッカーシズムの運動を生みだした。これは、体制へ

の国民の信託を要求し、市民的自由の抑圧と思想の画一化の状況を引き起こした。この状況は、残虐なテロルの側面こそ薄かったとはいえ、デューイの言う全体主義的生活様式の現れのように見えた。それは、残虐なテロルの体制を伴わない別の形の全体主義が民主主義体制の中で生じる危険性を示すものであった。アメリカはソ連との冷戦状況の中で、平時における戦争体制の恒常化とも見える「兵営国家」の道を歩んだ⁶²⁾。

今日、経済のグローバル化を背景にして、各国の人びとの生活において、格差が拡大し、不安感や閉塞感、そして孤立感が瀰漫している。マス・メディアの画一化の傾向、異なる意見への不寛容、人種的な差別に基づく蔑視や憎悪の感情的発言などが頻出している。そして、ポピュリズム的政治が横行し、また、市場経済を絶対化するような市場原理主義的イデオロギーが幅を利かせている。さらに、世界の地域紛争における宗教的あるいは民族的イデオロギーへの狂信と残虐なテロルを伴う紛争が世界で絶えることもない⁶³⁾。

さらに、SNSなどに見られる最新の情報通信メディアの発達には、確かに人びとの間でコミュニケーションの促進や拡大をもたらすかに見える。だが、真のリアリティから離れた仮想空間の中での交流は、面識的な人間関係を希薄化させるとともに、知的で開かれたコミュニケーションというよりも、感

61) Ibid., 49, 47頁。デューイの参戦支持については、小西2016。

62) フレ、608頁。米ソ冷戦の端緒となった「トルーマン・ドクトリン」において、民主主義と全体主義の二つの生活様式の対立というコトバが使用された。デューイはトルーマン大統領の政策を支持し、文化自由委員会に結集した他の有力な知識人たちは、冷戦状況下で保守的な反共主義の立場に移行した(Wald, Part III)。冷戦文脈での全体主義論については、トラヴェルソ、第六章。川崎1998, 223-224頁。デューイと冷戦については、彼が大戦後の国際関係をどう見たかの問題を含めて、別稿で検討する予定である。

63) 藤田は、アレントの全体主義論を踏まえて、20世紀の全体主義が「戦争の全体主義」、「政治支配の全体主義」、「生活様式の全体主義」という異なった三つの形態をとって現れてきたと指摘した。特に、「生活様式の全体主義」は、「経済中心主義の一環」(「市場経済全体主義」)として「平和主義的なもの」であるが、「社会の基礎的次元に達した根本的「全体主義」」であり、「不快の源そのもの」を全面的に除去して、一面的な「安楽」を追求しようとする「安楽」への全体主義」において顕著であるとされた(16頁、50頁、5頁)。かかる見方は、デューイの言う全体主義的生活様式の内実がさらに掘り下げられて分析されている例だと思われる。

情的な、また独断的な発言の肥大化をもたらしている。その結果、具体的経験に基づく相互的な検証を伴わない虚構の、あるいは虚偽の絶対主義的イデオロギーにいかれて、差別や憎悪に満ちた言論や行動をますます拡大する危険を含んでいる。

デューイに従えば、かかる状況はかつて全体主義的体制を生み出し、それを支えた生活様式に近く、民主主義にとって危険な兆候であろう。このように考えれば、民主主義的生活様式の確立を訴えたデューイの主張は今日なお切実な意味をもっているように思われるのである⁶⁴⁾。

引用・文献リスト

- ◎ Dewey, John 1937 Significance of the Trotsky Inquiry, *The Later Works*, Vol.11, Southern Illinois University Press
- ◎ —, 1938 Freedom and Culture, Ibid., Vol.13. (明石紀雄訳『ジョン・デューイ アメリカ古典文庫 13』, 研究社 1975)
- ◎ —, 1939a I Believe, Ibid., Vol.14.
- ◎ —, 1939b Creative Democracy— The Task Before Us, Ibid., Vol.14.
- ◎ —, 1939c The Basis for Hope, Ibid., Vol.14.
- ◎ —, 1939d The Basic Values and Loyalties of Democracy, Ibid., Vol.14.
- ◎ —, 1939e Democratic Ends Need Democratic Means For Their Realisation, Ibid. Vol.14.
- ◎ —, 1939f The Committee for Cultural Freedom, Ibid., Vol.14.

- ◎ —, 1941 Lessons from the War—in Philosophy, Ibid., Vol.14.
- ◎ —, 1942a *German Philosophy and Politics*, Revised Edition (Reprinted by Putnam's Sons 1977) (足立幸男訳『ドイツ哲学と政治』, 木鐸社 1977)
- ◎ —, 1942b Religion and Morality in a Free Society, Ibid., Vol.15.
- ◎ —, 1947 Behind the Iron Bars, Ibid., Vol.15.
- ◎ Bernstein, R.J. 2005 *The Abuse of Evil*, Plity
- ◎ Bullert, G. 1983 *The Politics of John Dewey*, Prometheus Books
- ◎ Wald, M. A. 1987 *The New York Intellectuals The Rise and Decline of the Anti-Stalinist Left from 1930s to the 1980s*, The University of North Carolina Press
- ◎ Westbrook, R.B. 1991 *John Dewey And American Democracy*, Cornell University Press
- ◎ アーレント、H.(大久保和郎・ほか訳) 1951『全体主義の起源 3』(みすず書房、1974)
- ◎ 井上弘貴 2008『ジョン・デューイとアメリカの責任』(木鐸社)
- ◎ カッシーラー、E.(宮田光雄訳) 1946『国家の神話』(講談社学術文庫、2018)
- ◎ 川崎修 1998『アレント』(講談社)
- ◎ クリック、B.(小林昭三・ほか訳) 1973『政府論の歴史とモデル』(早稲田大学出版部、1977)
- ◎ クルトワ、S.、ヴェルト、N.編著(外川継男訳) 1997『共産主義黒書<ソ連篇>』(恵雅堂出版、2001)
- ◎ クルトワ、S.、パネ、J.編著(高原武智訳) 1997『共産主義黒書<コミンテルン・アジア篇>』(恵雅堂出版、2006)
- ◎ 小西中和 1991『デューイ政治哲学研究序説——思想形成過程史論——』(滋賀大学経済学部)

64) パーンスタインによれば、「9・11以後、アメリカは不安、恐怖、不確実性に陥り、道徳的現実性や絶対性を求めるようになった」として、それに対抗するために、アメリカの伝統であるプラグマティズムの「マチガイ主義の精神態度を育て支えること」を提起している(Bernstein,30)。「マチガイ主義(fallibilism)」とは、人間の認識にとって絶対的な真理はありえないから、思想や行動においてお互いにマチガイをすることを避けられない。だから、具体的な行動の結果の検証によってマチガイを修正してゆくことが必要であるという態度である。この態度に基づくならば、絶対主義的イデオロギーにいかれて、自分の意見や行動が唯一の正しい立場であると錯覚し、他者に対する感情的で不寛容な行動をすることも減っていくであろう。パーンスタインの提起は、民主主義的生活様式の創出の必要を主張したデューイの立場と同じであるように見える。

- ◎——, 2003『ジョン・デューイの政治思想』(北樹出版)
- ◎——, 2017「ジョン・デューイとソ連(1)」「ソヴィエト・ロシア印象記」(1928) 『彦根論叢』413号(滋賀大学経済学会)
- ◎——, 2017「レオン・トロツキーの擁護と批判 ジョン・デューイとソ連(2)」 『彦根論叢』414号
- ◎コーゴン, E. (林功三訳) 『SS国家』1974 (ミネルヴァ書房、2001)
- ◎コーン, J. 編 (齋藤純一・ほか訳) 1994『アーレント 政治思想集成 2』(みすず書房、2002)
- ◎新川健三郎1973『大恐慌とニューディール』(平凡社)
- ◎——, 1982「1930年代のアメリカにおけるリベラル知識人のソ連観」 『史論』35号
- ◎トラヴェルソ, E. (桂本元彦訳) 2002『全体主義』(平凡社、2010)
- ◎ノイマン, F. (加藤榮一・ほか訳) 1944『ビヒモス—ナチズムの構造と実際—』(みすず書房、1963)
- ◎ノイマン, S. (岩永健吉郎・ほか訳) 1942『大衆国家と独裁』(みすず書房、1960)
- ◎ヒトラー, A. (平野一郎・ほか訳) 1925『わが闘争 上』(角川文庫、1973)
- ◎——, 1927『わが闘争 下』(角川文庫、1973)
- ◎藤田省三 1995『全体主義の時代経験』(みすず書房)
- ◎フュレ, F. (楠瀬正浩訳) 1995『幻想の過去 20世紀の全体主義』(パジリコ、2017)
- ◎ブラッハー, K.D. (山口定・ほか訳) 1969『ドイツの独裁 I』(岩波書店、1975)
- ◎宮田光雄 1991『ナチ・ドイツの精神構造』(岩波書店)
- ◎森田尚人 2005「ジョン・デューイと全体主義の時代経験」 『日本デューイ学会紀要』46号
- ◎ラージ, D.C. (大西哲訳) 1990『全体主義と政治暴力』(三交社、1993)
- ◎ルフォール, C. (渡名喜庸哲・ほか訳) 1994『民主主義の発明 全体主義の限界』(勁草書房、2017)

Totalitarianism and Democracy

John Dewey and the Soviet Union (3)

Nakakazu Konishi

Dewey recognized the similarity of dictatorships of Stalin and Hitler. They resort to unmitigated coercion, intimidation and sheer force. Dewey opposed the totalitarianism of Soviet Russia and Nazi Germany.

Totalitarianism combined abstract absolute “ideals” with cruel force. Idealism was separated from analysis and experimental utilization of concrete social situation. It justifies the method of violence.

Stalin has the theory of class war derived from Marxism as ideology. It was intolerant of dissidents because of its monolithic and absolutistic character. Every dissident was liquidated for crimes against Soviet State. The dogmatic logic of ideology justified Stalin’s terror.

Hitler appealed the idealism to German people. It was composed of the racial theory and Social Darwinism. He emphasized the intrinsic superiority of German people and its predestined right to determine the destiny of other nations. If there are those who are unwilling to cooperate, he liquidated them by ruthless force.

War with totalitarianism is war against a totalitarian way of life. We should create a democratic way of life. It commits us to unceasing effort to break down the walls of class, of unequal opportunity, of color, race, sect, nationality, which estranges human beings from one another.